OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第一部　講演会［後半］

（２）公開講座の源流を探る

山本　珠美（香川大学生涯学習教育研究センター准教授）

皆さん、こんにちは、山本です。今まで50分ほど、稲富先生から24年間続けてこられました公開講座のエッセンスについてお話しいただきましたが、そもそも大学は正規課程の二十歳前後の学生以外の方々、一般の住民の方々に、公開講座というものをいつごろから始めたのでしょうか。今日ご来場の皆様方が行っているような学習が、歴史的にどのように位置付けられるのだろうか、ということをお話しするのが私の役割です。「公開講座の源流を探る」というテーマで30分ほど私からお話をさせていただきたいと思います。

そこで、最初に皆様にクイズをいたします。そもそも、香川大学が一般の住民の方々に公開講座という形で学習機会を提供する事業は、いつごろから始まったものでしょうか。三択で聞いてみたいと思います。１つが30年前。今日のシンポジウムが生涯学習教育研究センターの30周年記念ですが、センターができたころに始まったのではないか、というのが１番目の選択肢ですね。

いえいえ、もっと前からではないか。２番目の選択肢は60年前です。60年前といいますと1948年ということになります。戦後ですね、第２次世界大戦が終わってすぐ、そういう事業が始まったのではないか。

いえいえ、そんなものではなく、もっと前からではないか、80年ぐらいさかのぼれるのではないか。これが３番目の選択肢です。80年前ということは1928年ということになりますが、実は昭和初期から住民向けの講座をやっていたのではないか。さあ、いかがでしょうか、30年前なのか、それとも60年前なのか、はたまた80年ぐらい前なのか、別に指したりはしませんので、その場で手を挙げてみて下さい。

では、１番目の30年前、センターができたころからではないかと思われる方。はい、ありがとうございます。次に、戦後すぐの60年前ぐらいではないかと思われる方。はい、ありがとうございます。１番、２番だいたい同じくらいだったかなという感じがしました。それでは３番目、もっと前、戦前、80年前ぐらいからではないかと思われる方。はい、ありがとうございました。ちゃんとは数えていませんが、前から拝見していますと、だいたい３分の１ずつ分かれたなという感じがいたします。

実はこれは３番が正しいんですね。80年前というのが正しいわけです。それでは、これからその80年間の歴史をスライドでたどってみたいと思います。

歴史を語る時にはだいたい古い方から語っていくものですが、今日は逆に新しい方からたどっていってみようと思っています。30周年記念の講演会ということで1978年（昭和53年）ですね、大学教育開放センター、生涯学習教育研究センターの前身が作られたという年です。ちょうど30年前です。1991年（平成３年）に名前が変わったというのは最初の副学長の挨拶でもありました。この写真、昔からセンターの事業に参加してくださっている方は懐かしい思いをされるかもしれません。今の生涯学習教育研究センターは、香川大学教育学部キャンパスにありますけれども、30年前の段階では経済学部キャンパス内にセンターがございました。これがその当時のセンターです。

では、30年前に、どうしてこういうセンターが作られたのでしょうか。その当時のことを前後にわたって書いてみましたが、大きかったのは1964年（昭和39年）に文部省から通知が出ました「大学開放の促進について」です。この通知が出されることによって、全国各地の大学で公開講座というものが少しずつ進んでいったと言われています。そして1973年（昭和48年）、東北大学にセンターが作られました。これが

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

全国で初めてのセンターです。そして1976年（昭和51年）に金沢大学のセンターが作られました。これが２番目。そして２年後に香川大学の大学教育開放センターが作られました。それが全国で３番目だったんですが、いずれもここに挙げたのは国立大学です。私立大学でも、今、生涯学習センターというようなものは作られておりますけれども、その嚆矢となったのが、1981年（昭和56年）の早稲田大学エクステンションセンターだと言われております。香川大学にセンターが作られたのは、比較的初期の段階なんですね。このあたりにまず３つの大学で設立され始めて、その後80年代90年代になって徐々に増えていったということです。

これが30年前の状況ですが、30年前にセンターが作られる前から、実は公開講座は行われていました。一気にさかのぼりまして60年前、正確に言うと59年前ということになりますが、香川大学の設立が約60年前ということになります。1949年（昭和24年）５月31日に経済学部、学芸学部（現在の教育学部）からなる香川大学が発足しております。香川大学が誕生したその年の９月に、経済学部が第１回目の専門講座というのをやっております。当時名前は公開講座ではなく専門講座というふうに言っておりましたけれども、大学ができたと同時に地域向けの講座というものは始まっていたわけですね。

また少しその前後のことを書いてみましたけれども、戦後法律が変わりました。学校教育法というものができます。1947年（昭和22年）のことです。そして香川大学が設立されたのと同じ1949年、昭和24年には、社会教育法という法律が新しく制定されました。この２つの法律いずれにおいても、公開講座というものを奨励したのです。名前が統一はされていませんが、公開講座と言ってみたり、文化講座と言ってみたり、専門講座と言ってみたり、さまざまな言葉遣いはされていますが、内容としては住民向けの講座を進めていきましょうということが言われたわけです。

こういうこともあって、この時期に公開講座が各地で始められたんですね。香川大学は、そのままずっと続けていってセンターができたわけです。継続されなかった大学もあったようですが、香川大学の場合はこの時期からずっと継続して行われていたのです。今日、後半のシンポジウムにお呼びいたしました金沢大学さんも、この時期ですね、1951年（昭和26年）に第１回の大学開放講座、今で言うところの公開講座が実施されています。新制大学ができた当時から実はやっていたわけですね。今のように、センターがあって大々的にやっているというわけではないんですけれども、細々とではあったかもしれないけれども続けていたわけです。

さて、香川大学ができたのが60年前で、その当時から公開講座をやっていたということですが、先ほど答えは80年前だったじゃないか、それはおかしいじゃないかと思われてしまうかもしれません。次に、これは遠くの方はちょっと見えにくいかもしれませんけれども、高松市の昭和12年の地図です。高松駅のあたりが切れてしまっているので出てはいないんですが、このあたりが駅ですね。線路があるから分かるかと思います。これが高徳線、これが予讃線ですが、ここに今、幸町キャンパスがあります。北の方に教育学部、南の方に経済学部キャンパスがあります。今、香川大学のキャンパスのあるところには、戦前もすでに学校は存在したわけです。学芸学部、教育学部の前身は師範学校、そして経済学部の前身は高松高等商業学校だったわけです。そして、調べてみますと、この高松高等商業学校、ここが実は全国的に見てもかなり熱心に公開講座を実施していた学校だったんですね。今から80年前というと1928年ですが、もうちょっと前です。1925年（大正14年）にこの高松高等商業学校が夏に夏期講演会を開催します。高松高等商業学校が授業を開始したのが1924年（大正13年）ですから、開校の翌年ですね。できたとほぼ同時に、こういう一般向けの講演会というものを実施していたということが判明しております。

今、前に映したのが、ちょっと画像は粗いんですけれども、高松高等商業学校の正門ですね。高松空襲

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の時に焼けてしまいました。次は銅像なんですが、経済学部キャンパスの中には２つ銅像があります。そのうちの一つです。２つのうちの一つは、これは皆様よくご存じかと思うんですが大平正芳さんです。大平正芳さんは高松高等商業学校を卒業されて、その後、総理大臣をなさった方、今からそれこそちょうど30年前です。1978年に時の福田内閣が倒れまして、福田赳夫内閣の方ですけれども、その後、大平正芳内閣になった、その大平さんの銅像が１つ目。ですが、実はもう１つあるんです。この写真がもう一つの方の銅像で、あまり皆さんはご存じないと思われますが、隈本繁吉という人物です。この人が高松高等商業学校の初代の校長先生です。なかなかお名前をご存じないかもしれませんけれども、例えば松本清張の『小説東京帝国大学』の中に実名で登場してきたりだとか、あるいは『夏目漱石全集』を見ていますと、夏目漱石とも親交があったらしく、所々でお名前が出てきたりというような方だそうです。この隈本繁吉初代校長が、かなり地域貢献ということに熱心だったということが調べていくうちに分かったのです。香川大学の公開講座、延々と歴史をたどっていくと、ここにまでたどり着きます。

では、この1925年の夏期講演会、どんな内容だったのか、ちょっとご紹介させていただきます。日程は大正14年７月15日水曜日から21日火曜日、７日間連続で毎日午後７時から９時50分まで合計21時間の講座だったということです。会費、お金の話は何となくしにくい雰囲気かもしれませんが、１円50銭。当時、お砂糖１キログラムが50銭弱だったそうです。砂糖３キロ分の価値があったのかどうかは分かりませんが、とにかく会費は１円50銭でした。

内容ですけれども、高等商業学校だったということもございまして、商業関係あるいは経済関係の内容が多いなというのが分かるかと思います。「科学的管理法」なんていうのはまさにそうですし、「経済生活の社会化」だとか、「経済思想発展の跡をたどって」とか、経済という言葉が目に付きます。あるいは、この大正14年（1925年）というのは、第１次世界大戦が終わってしばらくした時期ですので、国際関係というものに人々の関心は高かったように思えます。「外交問題」とか、「欧州大戦のイギリス国民経済に及ぼした影響」とか、そういうわりと硬いテーマで講演が行われていたということです。

さて、この講演会ですけれども、当時、香川新報という新聞がございました。今の四国新聞の前身です。四国新聞は戦後に四国新聞になったわけでして、それより前、この時期はまだ香川新報と言っていました。当時の新聞を香川県立図書館で発見しまして調べてみたところ、香川新報がどういうふうに報じていたのかといいますと、こんなふうに書いてありました。「講演の内容は学術的にまとまった極めて有益なるもので、いずれも学識経験ある斯道の講師が、深き蘊蓄を平易に理解しやすく説くといえば、興味津々たるものがあるであろう」というようなことが書かれてあるわけですね。大変期待が高かったということが伺われます。前後して、この夏期講演会について大変多く紙面を割いて報道しています。

中には現時点から見ると面白い記事もあります。これは夜間の講座でした。当時、交通手段はどうだったかと言いますと、この大正14年、高徳線ができたのがこの年なんですね。ようやく高徳線ができたという年です。予讃線はすでに通っておりました。通ってこられないこともないという状況ではあったようですが、とはいえ終わるのが夜の９時50分です。ということで、当時、高松高商は何をしたかというと、新聞記事にこんなのがあったんですね。希望する者には寝室と蚊帳を貸し出す、と。

脱線しますが、この当時の記事をいろいろ調べてみますと面白いなと思います。高松高等商業学校は新しくできたばかりの学校ですので、全国各地から新任の教員が集まってくるわけです。中には小樽の高等商業学校から来た先生もいます。東京から来た先生もいます。神戸から来た先生もいます。いろいろなところから来たその新任の先生が、新任の挨拶というのをします。それが記録として残っているんですが、高松に来て気になったことが３つあるというんですね。１つ、溜め池が多い。２つ、自転車が多い。そし

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

て３つ目、蚊が多い。その当時の新聞を見ますと、本当に蚊に関しての報道は多くて、１番目の溜め池、２番目の自転車が多いというのは、今でも通用するかなと思うんですが、その当時は、蚊が多いというのが外から来た方々にとっては非常に興味深いところだったようであります。とにかく寝室と蚊帳を貸し出すというような新聞記事が出ていました。

あるいは、この講演会は基本的には高松高等商業学校の先生が講演をしたわけですけれども、中には大変有名な先生を外からお呼びしてという場合もありました。そうすると、アイドルの追っ掛けよろしく新聞記事に何時何分高松港着の船でやって来るというようなことが報道されていたり、あるいはその先生はどこそこにお泊まりになられるみたいな、そんなことまで書いちゃっていいんだろうかというようなことが書かれてあったりします。この講演会、実際全部で300人ぐらい集まったということですけれども、大変なにぎわいを示したということだそうです。

その当時、1925年前後ですけれども、こんなことがありました。1919年（大正８年）に、ちょっと漢字ばかりで申し訳ないんですが、高等諸学校創設及拡張計画というものが帝国議会の中で可決されました。今どこの都道府県に行っても必ず国立大学というのはありますよね。香川には香川大学、徳島に行けば徳島大学、高知に行けば高知大学、愛媛に行けば愛媛大学、岡山に行けば岡山大学というふうに１県に必ず１校、国立大学はあります。東京だとか大阪だとか北海道みたいな広いところ、あるいは人口が多いところは国立大学の数も１つに限らないわけですが、なぜそういうふうになったのか、あるいはいつごろそういう体制ができたのかといいますと、これなんですね。この高等諸学校創設及拡張計画が非常に重要でして、原敬内閣、初の本格的政党内閣といわれる原敬内閣による計画です。全国各地に満遍なく官立の、今で言うところの国立ですね、国立の高等教育機関を作りましょうということで、沖縄県を除いて、１府県１高等教育機関が実現しました。すべての県に高等教育機関ができました。当時は大学もありましたが、香川県でしたら高等商業学校、徳島だったら高等工業学校というふうに大学とは限らないんですが、後にその土地の県名大学になるような学校が作られたのが、この大正８年の前後だったわけです。高松高等商業学校は12番目の高等商業学校として作られました。全国に高等商業学校というのは13校ありました。プラス、実は植民地に３校あったんですけれども、今の国内で見ますと13校です。その12番目ですから遅い方なんですけれど。２番目は神戸高等商業学校です。神戸高等商業学校はだいぶ昔にできているわけですが、そこに商業研究所という研究所が作られまして、ここがさまざまな講座を実施していました。

さて、高松高商では、夏期講演会をやったその翌年から成人教育講座というものを実施します。これは昭和16年度まで毎年継続しましたが、これが戦後のいわゆる公開講座になっていくわけですね。夏期講演会およびこの成人教育講座というのが昔の公開講座の形式だったわけです。そして、こういった事業を推進していくための部局として、高松高商に商工経済研究室というものが作られていました。これが今のセンターの前身とは言えませんけれども、センター的なことを戦前やっていたところなんですね。

そのモデルとなったのが、おそらく先ほど挙げた神戸高等商業学校の商業研究所だろうというふうに思われるわけです。後ろの方は見にくいかと思いますが、お手元に同じ資料が入っておりますので、後でご覧になっていただければと思いますけれども、商工経済研究室が何をやっていたかというものなんですね。細かいことは一切見る必要はございません。一番上のところをご覧下さい。内部事業と対外事業と２つのことをやっていたと言っているんですね。対外事業として集会の開催があります。講演会だとか、あるいは連続講座であったり、あるいは展覧会をやるだとか、映画会をやる。映画会はチャップリンの映画ですとか、あるいはツェッペリン号という飛行船が世界一周をすると、その時の記録映画だとか、そういうものを階段教室、こういうような教室がありましたので、そこで映画会を開催する。展覧会について

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

は、当時は今のように気軽に海外旅行はできませんから、海外で集めてきたさまざまな物品をそこで見せるというようなことをやっていたりしました。それから面白いところでは、ラジオの受信会というのをやったというんですね。大正14年というのがどういう年か、高徳線ができた年と先ほど言いましたけれども、今のNHKの前身の東京放送局というのができて、そこが初めてラジオ放送をしたのが大正14年だったんです。夏期講演会が始まった年ですね。大阪でも同じ年に放送が始まっているのですけれども、それをじゃあ受信しようということで、何と、すごい大雨の中400人もの人が高松高商に集まってラジオの受信をしたというようなことが大きな新聞記事になっています。そういう地域住民にとってのある種の何と言いましょうか、学習の場でもあるんだけれども、文化センター的な役割も果たしていたと言えばいいでしょうか、そんな事業を行っていたというわけです。

ちなみにこちらのチラシは、私が大学の中から発掘いたしました。まさに発掘といった言葉がぴったりくるような感じなんですけれども、昭和４年度の成人教育講座のチラシです。今の公開講座のポスターだとか、チラシだとか、ああいうものの昭和４年のバージョンです。公民科だとか経済科だとかというのが書いてあるのが分かるかと思います。聴講料は無料ですが、資料代として50銭くださいというようなことが書いてあったりします。

このように、たどっていくと83年前までたどれるんですよということですが、日本における公開講座の発展をもう少し見ていきますと、おおむね４期に分かれます。４期に分かれるんですが、高松でといいますか、香川県で行われていたのはここに書いてある２期から始まっていくわけですね。第２期、すなわち大正から昭和初期のころに高松高商が成人教育講座などをやりましたと。その後、第３期、つまり第２次世界大戦後に社会教育法だとか、学校教育法という法律ができることによって、いろいろなところでおびただしいかつてない盛況といわれるような大学公開講座の盛り上がりの時期というのがあったと。そして第４期、センターができた頃ですね、70年代、公開講座を専門的に行う部局ができましたというような形で流れていきます。ただし、日本全体に目を向けてみると、まず第１期というのがあったんですね。この第１期に、私立大学が巡回講演あるいは講義録というものを出版して、通信教育のようなことを始めたりということをしているわけです。その嚆矢となったのが、1886年（明治19年）にまでさかのぼりまして、早稲田大学、昔は東京専門学校と言っていましたが、ここが始めました。

それはいったいなぜなのか、そもそも公開講座的なものが日本で始まった最初のきっかけは何だったのか。先ほど稲富先生が、お金のためにうんぬんとかって仰っていましたけれども、実はお金が欲しかったんですね。当時、官尊民卑で帝国大学には国がお金を与える。だけど私立の大学にはお金はやらんということで、大学は自ら稼がなきゃいけなかった、と。発展していくためにはどうしても大学のことをアピールもしなければいけないし、学生の勧誘もしなければいけない。そのために巡回講演会というものを始めていったわけです。明治の時期にそういうものを始めたわけですが、香川県にも巡回講演に来ていますから、私立の大学がまずは先導したわけです。では、何で私立大学はこういうことを明治初期に始めたのかといえば、家永豊吉という、この方は早稲田大学の先生だったんですが、欧米を学んでいるわけですね。ヨーロッパあるいはアメリカの大学では、大学というのは二十歳前後の学生だけに授業をしているわけではなく、地域住民に対しても講義をやっているんだということを紹介したわけです。それが基になって私立大学で公開講座的な事業が盛んになっていったのです。では、誰が欧米でそのようなことを始めたのか、それは誰かといいますとジェームズ・スチュアートという方です。

皆様、お手元にこのパンフレット一式お渡ししているかと思いますが、パンフレットを開けますと、ここにいろいろな資料が挟まっています。この資料をちょっと取ってください。取って後ろに現在の生涯学

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

習センターの写真がありまして、上に２人の偉人の言葉というのが挙がっています。下の方、英語で書かれているこの言葉、これはジェームズ・スチュアートが1871年にケンブリッジ大学に対して、学生だけではなくもっと外に向かって講座をしていきましょうよということを、大学当局に訴えた書簡の中の一文なんですね。「真の教育は継続的でなければならないし、また十分学識のある人から与えられるものでなければならない」という言葉をジェームズ・スチュアートは言います。この言葉はよく引用されるんですが、だからこそ大学は地域住民に向けてさまざまな講座をやっていく責務があるんだということを言った。1873年からケンブリッジ大学が巡回講演、拡張講座、今の公開講座の源流にあたるものを始めていったということになります。

ということで、駆け足でずっとさかのぼっていったんですが、教科書的にはこれで終わりになります。生涯学習概論という授業を私は担当しておりますけれども、生涯学習概論の授業などでは、大学の公開講座というのはここに行き着くんだよという話で終わるわけです。けれども、実はこういう話があると、こっちではもっと早くからやっていたという話が出てくるんですね。

その一つの事例として、もう一つさかのぼってしまいますが、日本には1717年（享保２年）、これは暴れん坊将軍、徳川吉宗の時代ですが、湯島聖堂で仰高門日講が開始された、という記録があります。湯島聖堂というのは、この当時はまだ林羅山などで有名な林家の私塾があっただけなんですが、後に江戸幕府の官立の学校、高等教育機関である昌平坂学問所というものになっていくわけです。ちなみにこれが後に東京帝国大学になります。ですから東京帝国大学の前身のさらなる前身であるところの湯島聖堂で、当時、武士だけに許されていたはずの学問を、どんな人たちでも聞いてもいいですよという、そういう講座を始めたということが明らかになっております。身分の別なく誰でも学びたい人が来て学んでくださいというようなことが、大学ができるもっと前からあったんだと。

最後になりますけれども、先ほどジェームズ・スチュアートの言葉がこちらに書いてあると言いましたが、もう１つ漢文が書かれてあったかと思います。何と書かれてあったかといいますと、こういう言葉です。「少にして学べば、すなわち壮にしてなすことあり。壮にして学べば、すなわち老いて衰えず。老いて学べば、すなわち死して朽ちず。」これは江戸時代の儒学者の佐藤一斎が述べた言葉で、これもよく生涯学習の中では聞かれる言葉です。人が一生学んでいくこと、先ほど稲富先生の中にいかに生きるか、それが重要だというお話が出てきましたけれども、そういうところに通じるのではないかなと思います。

大学だけが生涯学習の場を提供しているわけではございませんけれども、大学もまたこの言葉を実践したいと思っているような方々に対して、これからもさまざまな学習機会を提供していくことができたらいいなと思います。このあたりで、私の話を締めくくらせていただきたいと思います。駆け足でしたけれども、ご清聴どうもありがとうございました。

司会

それでは一部はこれで終了です。二部につきましてですが、大変恐縮ですが３時10分から再開させていただきたいと思います。終了時間は４時となっております。ご協力のほどよろしくお願いいたします。